

通 産 官 僚

——政策とその実態——

秋 美 二 郎 著

通産官僚—政策とその実態— 定価 130円

1956年10月31日 発行

著 者 秋 美 二 郎

発 行 者 田 畑 弘

印 刷 所 株式会社 東 洋 社

製 本 所 池 田 製 本 所

発行所 株式会社 三 一 書 房

京都市左京区北白川西平井町24

振替 京 都 6 4 0 3 番

東京都千代田区神保町 1 の 14

振替 東 京 8 4 1 6 0 番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 69

通 産 官 僚

——政策とその実態——

秋 美 二 郎 著

三 一 書 房

目次

一	不気味な手押車……………	七
	兵隊の位でいえば 独占資本とミチイ	
二	通産省の銀座どおり……………	一五
	赤い干ブドウと黒い干ブドウ……………	一八
	買わざるものは売るべからず それでもブドウは黒かった こわいお礼まいり	
	大臣も知らない秘密リスト……………	二六
	消えた重要書類 パリと溜池のココム 一步後退した従属派 ばかげた戦略論議	
	宿命的な現局との対立……………	四一
三	現局の主人は誰か……………	四五

とばされた課長……………四六

種は五年前にまかれていた　世銀借款の登場　富士派と川鉄派の暗闘

無政策の政策……………五九

計画に百万トンの狂い　鉱石なしで鉄をつくるつもり　すべてはカルテルのために

切っても切れないくされ縁……………六二

四　産業行政のうらおもて……………六〇

新進気鋭の局長登場……………八一

気合をいれられた繊維局　おしきられた紡績　破れない利害のカベ

貝殻シエルにつぶされた軽工業局……………九一

シエル・三菱四日市をねらう　呉越同舟の共同会社　西は三井に、東は三菱に

仕上げは化学工業振興法

右往左往の石炭局……………一〇〇

どなられた大臣　石炭局長のあたえた言質　流されて残ったものは　大手業

五 通産省のなかの租界……………一三

ずらりと並んだ新鋭機

“里子”は引き取ったが——防衛産業対策の系譜……………二七

虫のよすぎるI計画 ベソをかいた愛知ミツション 「対米依存」から「自前」へ

“東洋の兵器廠化”の悲劇……………二三

身からでたサビ 「肥大症」と「出血症」 国有化は米国の圧力

自分の翼でとぶのはいつのこと……………一〇

パンからる出来ジェット機 ウナギのぼりの提携料 中型輸送機の国産化へ

「伸びてゆく海外特需」につなぐ夢……………一六

キャッチフレーズが「伸びゆく海外特需」 なるようにしかならない嘆き

手のこんだ特需確保対策

“デルタ地帯”は“租界だ”……………一四

六 官僚組織と省史……………一四

通産官僚の系譜——いわゆる岸＝椎名ライン……………一四

夜遊びがひどい岸信介 小林一三との一騎打 永山天皇の出現 復活した岸派

農商務省から通産省へ——七〇年のあゆみ……………一五

農商務省の設立 第一次大戦のぼっ発 商工省の誕生 満洲事変後の商工行政

時局の花形 太平洋戦争に突入 占領時代の通産行政 通商産業省の発足

七 日本資本主義の矛盾と反映……………一六

戦後資本主義の最大の矛盾 占領政策のカナメ 日本独占資本の復活

日米対立の焦点

あとがき……………一七

一 不気味な手押車

地下鉄の虎の門駅でおりる。警視庁の方に向って歩き、文部省わきの坂を少しのぼると左手にあるのが通商産業省である。ふきんには外務省、大蔵省、防衛庁、農林省、経済企画庁などがならび、このあたり一帯は霞ヶ関の中央官庁街とよばれている。

通産省は英語訳である Ministry of Trade and Industry (ミニストリー・オブ・トレード・アンド・インダストリー) の頭文字をとって、ふつうMITI(ミチイ)とよばれている。

ここは官庁のなかでも雑多な人間がいちばん出入するところである。新聞記者クラブも虎の門クラブ(朝日、毎日、読売、日本経済、東京、共同通信、その他五社、昭和三十一年八月一日現在総員七十五名)、采女会(時事通信、日刊工業、中部経済、その他十八社、三十一年八月一日現在、総員四十四名)ペンクラブ(業界紙五〇社、三十一年六月一日現在、総員八十九名)と三つもある。全部あわせると二百名以上の報道関係者がこのなかで活躍していることに

なる。

この建物はいつごろ建てたものか。それにしてもエレベーターが一台よりなく、十人ものればがたびしとふるえだす。動いているときよりも、“只今調整中”と木札をたてかけてあるときの方が多い。

一階は消費組合関係の売店がならんでいる。薬や化粧品をはじめ、家具、電気器具、靴、衣料、食糧など市値より二割ぐらい安くかえる。省内のものはもちろん、出入の業者などにもよく利用されてなかなか繁昌している。

二階は通産省の心臓部である。大臣室をはさんで、大臣官房の課がならび、部屋のなかでは重要な会議がひんばんにおこなわれているが、廊下の人どおりはいたって少い。省内ではもつとも静かな場所だろう。虎の門クラブと采女会の二つの記者クラブも二階にある。

三階はほとんど通商局関係でしめられている。外貨の割当を中心に、貿易商社の面々が朝となく昼となく出入するところできらびやかな服装の女性や、ハダの色のちがう人種もみられ、一種ことなつたフンイキをもっている。“通産省銀座”とよばれるところで、業界紙関係の記者クラブであるペンクラブもここにある。

四階と五階は、いわゆる現局とよばれるところで、産業別の構成になっている。ここもそれ

それぞれの業界人がよく出入する。

屋上にのぼると、晴れた日には東京湾が美しく見わたされる。お昼になると、組合関係の文化活動の中心舞台になりコーラスの歌声が、ここで働く若いひとびとの息吹をつたえてくれる。

兵隊の位でいえば

A君は三年ほどまえ大学をでると、大阪船場のある商社に入社することができた。本社で一年をすごしてから、東京支店詰となったが、彼の仕事は毎日ミチイにくることである。そこでする仕事は実にいろいろある。

たとえば盆暮のつけ届けもそのひとつである。シーズンがくると、A君はデパートの包みを山ほどもってきて、平生お世話になっている係官の机の下にそっとおしこむ。

ことし（昭和三十一年）は少しようすがかわっていた。部屋の入口に「虚礼はやめましょう」と貼紙がはっていた。「いつものことだ」ぐらいにおもって、包みをわたそうとすると、

『こういうものは頂くわけにゆきません』

とおし返された。が、そのあとすぐ声をおとして

『自宅の方へ送って下さい』

とつけたすことを忘れなかった。

あとで様子を聞くと、省内で受取った贈物は全部庶務課に集めて全員に公平に分配することになっていたのである。どおりで自宅へ送ってくれというはずだ。新生活運動も末端までくるとずいぶんとあやしくなる。

A君の本社は大阪だが、貿易の手続きなどでどうしても大阪通産局では処理できず、東京の本省の決済を必要とすることがおおい。A君のもっとも大きな仕事はこの辺にある。ところが大阪ですますことのできない手続などというものは、だいたい面倒なものにきまっている。本省にきてもなかなかラチがあかない。

こういうときに一ばんいうことをきいてくれるのは、けっきょく末端の係官である。しかし、手続規定すれのデリケートなケースであるばあいは、彼らは独断で決めたとなると、あとで上司から責任をとられるおそれがある。この辺のところは安全だということがわかると彼らはわかりが早い。

ところでA君が一ばんよく日常つき合っているのはこういう末端の係官である。彼らはだいたいは私学出身か、東大以外の学校系統で、何かの間違いでもないかぎりは一生涯とめても課長にさえなれない。彼らの生き方はこうである。かなりまとまった退職金が貰えるまで勤め、

よい機会をつかんで他に職を求める。それがうまくゆかないときは、じっくり腰をおしつけて恩給がつくまで頑張る。そして、他に職業をさがして、恩給と月給の二重どりでノンビリやろうという計画である。

へまをやって退職金や恩給がとれないようなことになりさえしなければ、どうせ大して出世するわけでもないから甘い汁はすった方がトクだ——というのが彼らの生き方である。

少し話がむずかしくなると、A君の方でもさかんに担当官をお茶にさそったり、飯をくわしたりする。それがしだいに待合やキャバレーへの招待に発展することだっておおい。まあちよつとした汚職の真似ごとである。

しかしA君の経験によると、こういう連中は要するに近頃流行の“兵隊の位でいえば”二等兵からせいぜい上等兵どまりである。

これにくらべて、出世コースにある東大卒業組はどうか。彼らが共通してもっているのはちよつとでも間違いは犯したくないという意識である。若いわりにすぐ班長や係長におさまっているが、末端の係官のように話のわかりはよくない。極端にいえば、杓子定規で貿易手続でも法律できまつた以外は絶対にとおさない。

ところが彼らにも弱みがある。ほんとうに仕事になれるまで一つの席にいることはない。こ

とにこの傾向は上級に進むほどひどくなる。それで各局や各課の実務に精通しているのは、東大以外の学校を出た班長クラスの人物である。しかも、実際の仕事は、この種の人物なしでは一切がストップしてしまふ。

A君がでくわす、むずかしい貿易手続などのばあい、実質的にさいごの決を下すのはこういう古参の実力者である。この男が了解すれば、課長のところも係長のところもけつきよくはメクラ判をおしてとおってしまふ。兵隊の位でいえば内務係准尉というところだろう。

こうしてA君は、三年間のミチイ通いのおかげで、やっと内部の人間関係も少しわかってきた。この事情をのみこんでからは、平素はつとめて二等兵や上等兵と仲よくし、多少の無理はきくようにしておく。そして内務係准尉については、あらゆる手をつかつて平生からとりいり、いざというばあいに備える。東大卒業組は適当にあしらえばよい。というのがA君のテクニクの結論となった。

しかしA君はこのごろよく考えることだが、彼の接しているのは通産省のほんの一部である。貿易手続の苦心や、盆暮のつけ届けのうらおもてはともかくとして、通産省には外部からはかり知ることのできない複雑な利害がうずまいていようにおもふ。

このあいだもこういうことがあった。

彼の会社では外国から染料を輸入している。繊維輸出を中心としている会社だから、輸出繊維用としてとくべつに染料を輸入しているのだ。ところが、今期の外貨割当でその染料についての割当はなくなった。そこであわてて通商局の輸入課に問い合せると、軽工業局からの指し金だという話である。軽工業局にたずねると、

『お宅では、輸出繊維用として輸入しているながら、実際は他に転売しているでしよう』という。A君の社としては、まったく根も葉もないことなので、口をすっぱくして説明してモガンとして聞きいれない。しかし輸入を禁止した理由をしつこく問いつめてゆくと、けっきょくは国内の染料メーカーの指し金であることがうすうすわかった。

こうなつてくるとA君は自分で習得した兵隊の位でいえば式の役人の分類も浅薄だという気がしてきた。そういう役人を動かしているもつと大きな力がほかに何かありそうなのである。

独占資本とミチイ

A君を苦しめ、まどわせ、わからなくさせている通産省とは？——

一階の廊下のすみには、ついこのあいだまで軍需省航空総局とかいた鉄製の手押車が埃にうずもれてころがっていた。これといって故障もしていないで、もう一度“軍需省”にかえる日

までまっているのか……とかんぐりたくなるような代物しろものであった。

あの太平洋戦争では、父祖代々の家業をもぎとり、飛行機工場へ老いも若きもかりたてた総本山はこの軍需省ではなかったか。いまでは通商産業省などというおとなしい名前にかわっているが、あのころ軍需省を牛耳っていた岸信介がこともあろうに次期総理の有力な候補になっている昨今だ。

ところで、通産省はまたバクチの総元締でもある。重工業局にある車両管理官というのがそれだ。早くいえば競輪のあがりあがりを監督する役人——といった方がピンとくるだろう。

いうまでもなく貿易行政の中心でもある。厳重な為替管理下にあるげんざいのようなシステムでは、外貨をにぎって割当てる力をもっている官庁にたいしては業者としては一目も二目もおかざるを得ない。

各種産業にたいする指導は、ふつう現局とよばれる重工業局、石炭局、繊維局などをおしっておこなわれている。昭和二十三年のころ、戦後の汚職事件のはしりともいうべき繊維疑獄事件というのもあった。

こういうふうにあげてゆけば、キリのないほどたくさんの横顔をもった通産省である。それではこの複雑な官庁を動かし、左右しているものは何であろうか。

二 通産省の銀座どおり

三階の長い廊下は俗に通産省銀座とよばれる。廊下の両側には通商政策、輸出、予算、輸入第一、輸入第二、為替金融、経済協力、市場第一、市場第二、市場第三、農水産、振興、輸出保険、検査、通商調査の各課がならんで省内第一の大世帯だ。なにしろ貿易に不可欠の外貨の割当を一手ににぎっているところだけに、貿易業者をはじめとして、いろいろの人種が毎日おしかけて、もっとも活気がある。

輸入発表によって申請をうけつける日など、わけてもこの廊下の雑踏はひときわはげしくなる。せまい外貨のワクをとるために、どっと業者がおしかけるから、ここの受付担当官などは何かとみいりがおおいという。

日本のように貿易が経済の動向に大きなウェイトをしめているところでは、通商局のサジかげんひとつで、国民生活が大いに左右される。ところが、国民の利害と貿易業者の利害とは、